

20 世紀初頭のインドと日本の共鳴—森鷗外「沈黙の塔」からの考察—

石原 いずみ*

Resonance between India and Japan in the early 20th century
—A Study of Mori Ōgai's 'The Tower of Silence'—

ISHIHARA Izumi

要約

森鷗外は、1910 年三田文学に短編小説「沈黙の塔」を発表した。この短編は、架空の塔を題材にし、同年に起こった「大逆事件」の大量検挙や、新聞に掲載された「危険なる洋書」と題するコラムに対して、寓意の形で批判したものであるとされている。鷗外は当時、陸軍省医務局長として活躍する一方で、文学博士として旺盛な創作活動に邁進していた。陸軍要人としての立場上、表立った政府批判は憚られたであろうが、一方で文学者としての矜持があった。

筆者はかつて 4 年間インドに暮らした経験があり、「沈黙の塔」が実在していることを知っている。本稿は実存している「沈黙の塔」を紹介し、森鷗外がその存在を知りえた過程を考察することを通して、19 世紀末から 20 世紀初頭のインドと日本が、経済的交流のみならず文化的に交流し、思想的に共鳴していたことを論じるものである。

キーワード： 森鷗外 ムンバイ パールシー 沈黙の塔

Abstract

Mori Ōgai published his short story 'The Tower of Silence' in *Mita Bungaku* in 1910. He wrote 'The Tower of Silence' (said to be an imaginary tower) to criticize the mass arrests in the 'Crimes of High Treason Incident' (*Taigyaku Jiken*) and a newspaper column titled 'Dangerous Western Books' published in the same year.

At the time, Ōgai was the Director of the Medical Bureau of Ministry of the Japanese Army. He would have hesitated to criticize the government due to his position as a key military official. But at the same time, he was pursuing vigorous creative activities as a Doctor of Literature and must have had pride in his position as a literary scholar.

The author, having lived in India for four years, can confirm that 'Tower of Silence' does

exist in reality. This paper first introduces the existing ‘Tower of Silence’. Then it discusses how Ōgai came to know of its existence, thereby arguing that around 1900 India and Japan had not only economic but also cultural exchanges and ideological resonance.

Keywords : MORI Ōgai, Mumbai, Parsi, The Tower of Silence

1. 沈黙の塔とゾロアスター教

1.1 「沈黙の塔」の实在

1910年11月、森鷗外は「沈黙の塔」というタイトルの短編小説を「三田文学」に発表している。同年6月、幸徳秋水こと幸徳伝次郎が前年の「自由思想」発刊など天皇暗殺謀議の罪で逮捕・検挙され、いわゆる「大逆事件」の首謀者として翌年には絞首刑に処せられた。また、東京朝日新聞には「危険なる洋書」と題するコラムが掲載され、鷗外も名指しで糾弾された。「沈黙の塔」は、これら一連の言論統制を批判する目的で、架空の塔を題材に暗喩を込めて書いたものであるとされている。⁽¹⁾

ここで、森鷗外「沈黙の塔」の細部をご紹介します。

「高い塔が夕の空に聳えてゐる。

塔の上に集まっている鴉が、立ちさうにしては又止まる。そして啼き騒いでゐる。

(中略)「へんな塔のある處へ往つて來ましたよ。」「Malabar hill でせう。」「あれはなんの塔ですか。」「沈黙の塔です。」「車で塔の中へ運ぶのはなんですか。」「死骸です。」「なんの死骸ですか。」「Parsi 族の死骸です。」⁽¹⁾

インド・ムンバイに関わったことがある人間であれば、この文章を目にして驚くはずである。ムンバイには、アラビア海に半島状に突き出た「Malabar hill」という名前の丘がある。筆者は1994年から4年間にわたりインドのムンバイ（当時は「ボンベイ」と呼ばれていたが、以降「ムンバイ」で表記統一）に暮していた。マラバルヒル Malabar Hill の中腹に立つ高層マンションの小窓からは、深い森が見えた。うっそうと木が茂った森の上空を、時折、鴉やハゲタカが旋回していた。森の中には井戸のような円柱形の塔が何基か建っている。ゾロアスター教徒が鳥葬を執り行う「沈黙の塔」である。神聖な森の中に異教徒が足を踏み入れることは出来ないが、知り合いのゾロアスター教徒から塔の詳細を教えてもらうことが出来た。また、妹尾河童「河童が覗いたインド」⁽²⁾にもその詳細が記載されている。

ゾロアスター教徒とは、ペルシャこと現在のイラン辺りを発祥とする拝火教徒である。7世紀ごろのサザン朝ペルシャ滅亡後、イスラム教の迫害から逃れて中央アジアやムンバイを含むインド西岸に移り住んだ彼らのことを、現地ムンバイでは「ペルシャから来た人」すなわち「パールシー」「パーシー」（以降「パールシー」と表記）と呼んでいる。

「Malabar hill」、「沈黙の塔」、「Parsi 族の死骸」、ここまで一致すると、鷗外がムンバイ

の「沈黙の塔」を題材として同名の短編を執筆したと確定することに異存はないだろう。なぜ森鷗外が「沈黙の塔」を知っていたのかについては、次章で考察を試みたい。

1.2 パールシーとタタ

その前に、ゾロアスター教徒「パールシー」について簡単に説明する。筆者は、「沈黙の塔」の詳細を聞いたパールシー女性から、次の逸話も聞くことが出来た。

10世紀ごろ現在のイランからイスラム教の迫害を逃れてインド西岸グジャラートに上陸したパールシーであるが、移民として受け入れられることは、どの時代も容易なことではなかった。土地を治めるマハラジャに謁見を申し込んだパールシーの長老は、マハラジャにこう説いた。

「ここにコップになみなみと注がれたミルクがあります。これにスプーン1杯の砂糖を入れてもミルクはこぼれることなく美味になります。私たちはあなた方にとってこの砂糖のような存在になりましょう。決して布教活動などをしてあなた方のコミュニティを乱すようなことはいたしません。」この説明にいたく感心したマハラジャはパールシーの民の移住を許可した。

逸話は、聖職者バフマン・カイコ・サンジャーナによって書かれた「サンジャーナ物語」(1600)に記されており⁽³⁾、パールシーの人々に代々語り継がれている。十数世紀前の逸話の真偽は定かでないものの、逸話の約束の通り、彼らは一切の布教活動をしない。異教徒がパールシーになりたいと願っても改宗することは出来ない。それどころか、パールシーの男性と異教徒の間に生まれた子はパールシーになれるが、パールシーの女性と異教徒の男性の間に生まれた子はパールシーになれない。その結果、パールシーの人口は減り続けており、何らかの策が必要でないかとパールシーの自治組織ボンベイ・パールシー・パンチャヤートで話し合いが持たれているが、方向性は未だ見出されていない。⁽⁴⁾ 布教活動をしないという約束を守る義理堅さ、真面目さと、さらに純血を守り続けたゆえの色の白さが、イギリスによるインド統治時代にパールシーが重宝された理由であると言われている。

イギリスによる統治時代に活躍したパールシーの代表格が、「インド産業の父」とも称される現・タタ財閥の創始者ジャムシェドジー・タタである。ムンバイにある5つ星ホテル「タージマハル・ホテル」を「インド人も泊まれる高級ホテルを作りたい」と手がけた人物でもある。彼自身は、非常に質素でつましい暮らしをしていたらしく、マハトマ・ガンジーをして「計り知れない富を持っていたが、非常にシンプルな暮らしぶりだった。インドに沢山タタさんがいたらよいのに」⁽⁵⁾と言わしめている。

現在、インドを代表する財閥へと成長しているタタ・グループであるが、2017年から会長となったナタラジャン・チャンドラセラカンとは、タタ・グループの150年近い歴史において初めて創始者ジャムシェドジー・タタと血縁関係もなく、パールシーでもない人物である。⁽⁶⁾ ここにもパールシーの人口減少が影響していると言えるかもしれない。

ロックバンド「クイーン」のフレディ・マーキュリーもインド系パールシーだが、彼の

生涯を描いた映画「ボヘミアン・ラブソディ」の中で、彼の両親が非常につましく真面目で道徳的な人物として描かれていたと記憶している。パールシーの気質は概ね真面目で道徳的で、20世紀初頭の新聞では「チャリティその名はパールシー」とまで呼ばれるほど慈善活動にも積極的である。⁽³⁾

2. 森鷗外が「沈黙の塔」を知りえた理由

ここからは、森鷗外がなぜ「沈黙の塔」の存在を知っていたかに焦点を当て、いくつかの可能性を検証していきたい。

2.1 鷗外の外航

森鷗外は1884年から1888年、医学生としてドイツに留学し、そこでドイツ女性と恋に落ち、その体験をベースに「舞姫」(1890)を執筆している。まず、この外航の途中にムンバイに立ち寄った痕跡を探す。

鷗外は帰国後の1889年に「航西日記」を執筆している。それによると、横浜を出航した船は香港、サイゴン（現ホーチミン）、シンガポール、スリランカ・コロombo、イエメン・アーデン、スエズ運河を通過し、コルシカ島を横に見ながらフランス・マルセイユに到着、その後陸路でベルリンへと向かっている。処々で土地の様子を書き記し、コルシカ島を見た折にはナポレオンについての漢詩を寄せている。⁽⁷⁾

しかし、ムンバイの記述が出てくることはない。実際この時期のヨーロッパ航路には、ムンバイに立ち寄る航路はなかった。

2.2 ムンバイ航路の誕生

鷗外が帰国してから5年後の1893年、日本とムンバイを結ぶ「ムンバイ航路」が誕生する。これは、当時ムンバイでタタ商会として綿花の商売をしていた上述ジャムシェドジー・タタの尽力による。彼はイギリス―中国の綿花商取引で財を成したのだが、英国船籍の船舶使用料の高さ、傲慢さに立腹し、来日して渋沢栄一と面会して打開策を図った。⁽⁸⁾ その結果、1893年に日本郵船によるムンバイ航路が誕生した。

これを機に三井物産の支社、横浜正金銀行の支店がムンバイに進出し、インド綿花の日本への輸入が始まる。20世紀初頭には伊藤忠商店、丸紅商店、鐘淵紡績など現在にも名前が繋がる神戸商人たちが参入し、やがて日本の綿製品がインドへ輸出されるようになる。そして、ガンジーのスワデーシ国産品愛用運動が始まって撤退せざるを得なくなる1920年代までのわずか四半世紀に、日本の綿布がインドの市場の50%に至るほど、インドと日本の経済活動は一気に進むこととなった。この間にムンバイ日本人会が設立(1918)され、その後の日本とムンバイの経済活動の中核となった。一旦中断せざるを得なくなった時期はあったものの、現在まで脈々と続いている。このムンバイ航路の開設は、インドのみならず、当時西欧諸国が植民地としていたアジア諸国と日本との経済交流の発展にも繋

がり、大東亜共栄圏的な流れへと時代を導くことになる。

2.3 インドと日本の文化的交流

2.3.1 大谷探検隊

明治維新の開国は、一気に世界との文化的交流を促した。仏教界では、幕末から明治初頭の廃仏毀釈運動に対して、科学的な方法を用い、仏教を近代的合理主義に合致した姿に変容させることに努めた。⁽⁹⁾ 折りしも西欧各地で広がり始めた仏教研究に着眼し、浄土真宗西本願寺の大谷光瑞らは、仏教の伝来を探る探検隊を組み、シルクロードはじめ各地に3回にわたる学術探検を試みた。

このうち第1次探検隊(1902-1904)は、中央アジアの他、インドの仏教遺跡の学術研究にあたり、探検隊の一人藤井宣正は、道半ばにして客死するが、体力に不安があったためムンバイを中心に⁽¹⁰⁾インド西岸のエローラ石窟群、アジャンタ石窟を調査した。インド調査の目的はアショカ王(特に碑文)の事蹟を調査することにもあった。⁽¹¹⁾

後世、藤井の残した日記が発見され、「印度霊穴探見日記」(1977)として刊行されるが、その一節に「馬車ニテ Malabar Hill 二 Tower of Silence ヲ見ル(中略)例ノ人肉ヲ食フ隼ハ附近ノ椰樹上ニ数多ク居レリ」の記述がある点は注目したい。藤井は、1859年越後国生まれで、慶応義塾大学に学んだ後、西本願寺派からの内地留学生として東京帝国大学哲学科で学んでいる(1988頃)⁽¹⁰⁾。鷗外の在学時期(本科卒業1981)とは、少々ずれる。

2.3.2 森鷗外 共著「阿育王事蹟」

インド仏教に関する鷗外の知見としては、「阿育王事蹟」も外せない。共著者である大村西崖は1868年生まれ、第一期東京美術学校の卒業生であり、後に同校教壇に立った東洋美術史家である。鷗外は、彼と共著の形で、紀元前3世紀のインドで仏教を庇護した阿育王(アショカ王)の伝記小説を執筆している。

「阿育王事蹟」は1909年に刊行されており、その数年前から草稿されたものと考えられる。その詳細は分かっていないが、アショカ王の石柱碑文に関する記述があり、前述の大谷探検隊のアショカ王の事蹟調査に触発されたものに違いない。「沈黙の塔」発表の前に、鷗外がインド哲学や仏教研究に関する見識を深めていたことは確実であろう。

2.3.3 岡倉天心とインド

ここで、鷗外が「沈黙の塔」を知りうるもう一つの可能性「岡倉天心」について考察したい。以下、鷗外と岡倉の類似点を記する。

鷗外は1862年に津和野藩医の子として誕生し、1873年、わずか11歳11か月で東京医学校に入学している。1876年には順調に東京医学高医学本科(現・東京大学医学部)に進学、数年年上の同級生に交じった卒業時の席次は8番であったが、主席の三浦守治をして「余ガ大学ニ在ルヤ同級生ニ森林太郎ノ俊才アリ(中略)畏敬セル競争者ナリキ」と言わしめている。

一方、岡倉天心は、福井藩士から貿易商に転じた父の下で 1863 年に誕生、こちらも 11 歳で東京外国語学校に入学、1877 年には東京大学文学部に編入している。その言語能力の高さを買われた岡倉が、東京大学の外国人講師として来日していたアーネスト・フェノロサと共に古美術店を巡り、やがて、京都奈良の神社仏閣調査に随行し、日本の文化財の再認識と保護に貢献したことは、教科書にも載っている話である。

岡倉とフェノロサは、東京美術学校（現・東京藝術大学）の創設にも尽力し、1889 年上野にて開校、1890 年には岡倉が校長を務めた。そして、当時陸軍軍医学校教官で「岡倉天心と親交のあった」森鷗外は美術解剖学の講師を務めた。⁽¹²⁾ 東京・千駄木にある「文京区立森鷗外記念館」には、この時に岡倉天心が鷗外に宛てた書簡が所蔵されている。⁽¹³⁾

この時点で十分に鷗外と岡倉の親交は認められるが、さらに情報を追加する。その後、訳あって東京美術学校を非職(1898)した岡倉が、「日本美術院」を創設して横山大観らと共に活動を始めたのは、東京・谷中にある現在の「岡倉天心記念公園」界限である。そこから徒歩 10 分ほどの前述「文京区立森鷗外記念館」は、鷗外が 1892 年から亡くなる 1922 年まで居宅とした「観潮楼」跡に建つ。これらのことから、二人は東京大学在学中から長きにわたって交流があったと推察される。(表 1：岡倉天心・森鷗外 略歴 参照)

(表 1) 岡倉天心・森鷗外 略歴

岡倉 天心	森 鷗外
1863 武蔵国横浜にて出生、父福井藩士・貿易商	1862 津和野にて出生、父藩医
1873 東京外国語学校入学	1873 東京医学校医学本科予科に 11 歳 10 か月で入学
1877 東京大学文学部編入(第 1 期生)	1876 東京医学校医学本科(1877 東京開成学校と統合され東京大学)
1878 フェノロサ東京大学外国人講師、岡倉天心が古美術店巡りサポート	
1880.8-9 フェノロサ京都・奈良神社仏閣調査に随行	1881 東京医学校を 19 歳 5 か月で卒業
1884.6-9 フェノロサと共に近畿神社仏閣調査、法隆寺夢殿の本尊開帳	1884-1888 ドイツ帝国陸軍の衛生制度調査のためドイツ留学
1887 東京美術学校創設	
1889 帝国博物館(現国立博物館)、美術部長就任	1889 東京美術学校にて美術解剖学講師(岡倉天心による招致)
1890 東京美術学校で「日本美術史」講師	1890 「舞姫」発表
	1890 千桑山房(後に夏目漱石居住)、1892-観潮楼(千駄木)
1893 シカゴ万国博覧会に美術行政官として視察	1892 慶應義塾大学部審美学(現・美学)講師、「即興詩人」
1898 東京美術学校 非職し、谷中初音町に日本美術院創設	1894 日清戦争従軍、戦後台湾勤務
1901.12 ヴィヴェーカーナンダ訪問のため訪印	
1903 「東洋の理想」インドで脱稿(英文)、「アジアは一つである」	
1903 茨城県北茨城市五浦に邸宅と六角堂	1904-1906 日露戦争に軍医部長として従軍
1910 ボストン美術館中国・日本美術部長	1910 慶應義塾大学部文学科顧問就任、「沈黙の塔」発表(Persi 族の内紛、三田文学)
1912 インド再訪	
1913 9 月 静養先赤倉で永眠	1919 帝国美術院初代院長(1937 帝国芸術院 1947 日本芸術院)
	1922 永眠。遺言により墓には「森林太郎ノ墓」とのみ刻される

年代を一旦遡るが、岡倉天心は、東京大学卒業後に、文部省（現・文部科学省）に入省し、美術行政官として東京美術学校の創設に携わった。1893 年のシカゴ万国博覧会には文部省から評議員として派遣され、「単なるエキゾチックな装飾品ではない」日本美術の発揚・復興に取り組んだ。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

その万博と並行して開催された「万国宗教会議」で、一人のインド人が流暢な英語で熱

弁をふるい、聴衆の喝采を浴びた。スワミー・ヴィヴェーカーナンダである。万国宗教会議での演説は好評を博し、その後も欧米を遊説し、ヒンドゥー教とヨガを世界に広めた。ベンガル・ルネッサンスとも呼ばれるヒンドゥー教改革を進め、植民地時代インドでナショナリズムの構築・高揚に貢献した人物で、インド国内では国民的英雄と評され、モディ現首相も彼の思想を信奉している。

岡倉がシカゴ万国博覧会の時点でヴィーヴェーカーナンダを知った記録はなく、留学生として来日していた彼の熱烈な信奉者の米国女性ジョセフィン・マクラウドに勧められてインドへと向かう。そしてたちまち意気投合し、インド美術の起源や仏教伝播などに関する議論を交わしたと思われる。⁽¹⁶⁾ そして、岡倉はカルカッタ（現・コルカタ）にて「アジアは一つである」で始まる「東洋の理想」（1903）を英語で出版し、日本美術・日本の文化に内包するアジアの思想を論じた。インド滞在中には多くの文化人とも交流し、大詩人タゴールの甥スレンドラナートとムンバイにも旅している。⁽¹⁷⁾

3. 「沈黙の塔」考察

3.1 鷗外「沈黙の塔」に描かれるパールシー

さてまず、日本とムンバイの経済活動による交流が鷗外に「沈黙の塔」の情報をもたらした可能性を考察したい。「沈黙の塔」を読み進めると、こんな表現が出てくる。

「なんであんなに澤山死ぬのでせう。コレラでも流行つてゐるのですか。」「殺すのです。又二三十人殺したと、新聞に出てみましたよ。」「誰が殺しますか。」「仲間同士で殺すのです。」「なぜ。」「危険な書を読む奴を殺すのです。」（中略）パアシイ族の虐殺者が洋書を危険だとしたのは、ざつとこんな工合である。（中略）藝術も學問も、パアシイ族の因襲の目からは、危険に見える筈である。なぜかといふに、どの國、いつの世でも、新しい道を歩いてゐる人の背後には、必ず反動者の群がゐて隙を窺つてゐる。そしてある機會に起つて迫害を加へる。只口實丈が國により時代によつて變る。⁽¹⁾

鷗外が当時の日本政府による言論統制を批判しているであろうことは容易に察しが付く。暗喩とはいえ立場を考えるとかなり勇気を持った作品発表と言える。

そして、作品中に描かれる「パールシー」であるが、現代においてこれが発表されたならば、パールシーから猛烈な苦情が寄せられるような扱い方である。鷗外はパールシーを「言論統制のために仲間を虐殺する民族」として描いている。

今一度、当時の日本とムンバイの関わりを考えたい。当時から現代にいたるまで、経済活動における日本とムンバイの関わりにパールシーの存在は欠かせない。当時の三井物産ボンベイ支社はパールシーを雇用して運営され、前述大谷探検隊の藤井がムンバイを訪れた際にはタタ邸で歓待するなど、日本人とムンバイのパールシーがいたって良好な関係にあったことが記録されている。⁽¹⁸⁾ 今現在も、ムンバイ日本人会の専属医師、歯医者、英語

教師等は、パールシーのケースが多い。

1893年のムンバイ航路の開設以来、日本経済界はパールシーに恩恵を受けている、或いは非常に良好な関係にあると言える。日本とインドの経済界のルートから鷗外がパールシーと沈黙の塔の存在を知った場合、たとえ鳥葬に恐れをなしたとしても、「沈黙の塔」本文中ほどの否定的な扱いはしないのではないか。

3.2 「沈黙の塔」における鷗外の二つの批判

筆者は、宗教的あるいは文化的交流に伴うインド宗教・インド哲学の知見が、鷗外に「沈黙の塔」の情報をもたらしたと考えるのが妥当であると考察する。仏教的知見あるいは岡倉による思想の共鳴に同意した可能性である。

岡倉天心の「東洋の理想」には「日本はアジア文明の博物館」という表現が出てくる。彼によれば、日本の文化は神道をベースに八百万の神、仏教、儒教を受け入れ融合させており、「古いものを失うことなく新しいものを受け入れてきた（中略）われわれの過去の中に新生の泉がある」⁽¹⁹⁾と説いている。一方、岡倉が感化されたヴィーヴェーカーナンダは、「万国宗教会議」の席で「ヒンドゥー教とは、世界の人々に全てを受容する寛容の精神を伝える宗教であり、そのことを悟る宗教でもある。（中略）人類が自らの神性を自覚する普遍宗教である」と説いた。

ヴィーヴェーカーナンダはヒンドゥー教に、岡倉は日本美術・文化の中に、「東洋文化の本能的折衷主義」⁽¹⁹⁾、寛容による普遍性を見出した。両者はそれぞれの国の美術・宗教・文化の類似性について共鳴していたと考えられる。

再度、鷗外の「沈黙の塔」を読むと、そこに出てくるパールシー族は新しいものを受け入れず、異端の思想を持つ仲間を虐殺する民族として描かれている。鷗外が、パールシーの純血主義と生真面目さを「異端の思想を受け入れない」閉鎖的姿勢として捉えていたならば、パールシーの描かれ方に納得がいく。鷗外は、パールシーの純血主義を、インドにおける寛容のヒンドゥー教に相対する性質のものとして解釈していたことになる。

「沈黙の塔」は、当時日本で起こっていた「大逆事件」への批判であると同時に、インド宗教と性質を異にするパールシーの純血主義に対する批判という二重の批判が込められていたと推察される。鷗外が実在するパールシーや「沈黙の塔」の名を敢えてそのまま使用したとすれば、それは、インド文明に関する見識を深める中で、岡倉同様にヒンドゥー教や仏教の寛容による普遍性に共鳴したことに依るのではないか。

4. 20世紀初頭のインドと日本の共鳴

20世紀初頭のアジア諸国は、欧米との交流よりはるかに早いスピードで経済活動を進めて交流した。植民地支配や不平等条約を含む欧米中心の資本主義とは異なる相対的自立の獲得を試みた。⁽²⁰⁾

そして、経済的な交流と並行して文化的かつ思想的な交流も盛んになった。始まりは宗

教的研究から派生したアジアの思想共鳴であったはずだ。しかし一方で、それまで西欧の植民地であったインドと、長きにわたる鎖国と地理的理由からそれを免れた日本とが、自立を目指すための思想構築も、時代の要求であった。インドは、植民地からの脱却・独立を目指し始めた時期にあり、日本は、西欧の脅威からの強い抵抗を試みていた時期である。両国とも多様性を寛容する文化をベースに、自立した国家を目指しており、そのためには、西欧の価値観にとらわれないナショナリズムの構築・高揚が不可欠だった。それは、インドの独立を導き、他方日本にとっては後の悲劇へと繋がっていく。

世界各地で自国主義による紛争が勃発する現在、かつてのインドと日本の共鳴を再考し、二度と同じ轍を踏むことなく、真の思想共鳴から導かれる協力関係を構築する必要があるのではないかと考える。インドと日本にはもとより、内包する東洋的観念、寛容といった思想の共鳴がある。

鷗外は、宗教的・哲学的な両国の共鳴に理解しつつ、両刃の刀である「ナショナリズムの高揚」に、静かな抵抗を試みていた。「沈黙の塔」には、インドと日本の文明の共鳴に同意する一方で、ナショナリズムの高揚のために行われる言論統制に異を唱えるというパラドクスが隠されている。軍医として日露戦争に従軍し、人間の残虐を目の当たりにしたことも、時代の流れへの彼の抵抗感を強めることになったに違いない。⁽²¹⁾

鷗外は、1907年に陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任したものの1916年には退位し、その後は帝室博物館総長の職に就き、晩年までを一文化人として過ごした。遺言により墓碑には、一切の称号を排し「森林太郎墓」とのみ刻まれている。⁽²²⁾

5. パールシー・タタに関する注釈と研究課題

最後になるが、ムンバイでパールシーのお世話になった日本人として、一言申し上げたい。パールシーは純血を守るという点で狭量あるいは閉鎖的と捉えられるかもしれないが、決して内部で虐殺をするような気質の人々ではない。

マハトマ・ガンジーがタタ創始者ジャムシェドジー・タタを評した文の一節をご紹介します。

「彼は、国からもらった名誉も肩書も気にしなかった。カーストも地位も関係なかった。ヒンドゥーもムスリムもパールシーも関係なく、彼にとってはただインド人というだけで良かったのだ」⁽⁵⁾

実際にタタは、ガンジーによる「企業役割としての社会貢献活動」の考え方に基づいて、奨学金設立、教育機関の設立（Indian Institute of Science）など教育、健康、コミュニティ発展などに尽力した。インド人のためのタージマハル・ホテル建設もその一環である。さらにタタ財閥は1918年にはSir Ratan Tata Trustを設立し、組織的な社会的貢献活動に踏み込み、現在においても「地域社会とのビジネスによって得られた資産を可能な限り地域社会に還元すべきである」という考え方の下、社会貢献活動を続けている。⁽²³⁾

本稿では、鷗外がなぜ「沈黙の塔」を知りえたのか、なぜこれほどパールシーの存在を酷評したのか、その理由を特定することは出来なかった。観潮楼跡に建つ「文京区立森鷗外記念館」には鷗外の長男・於菟とその知人らにより管理・整理された鷗外の遺品が数多く所蔵されているが、於菟が台湾帝国大学に赴任し戦後帰還する間、海上輸送の際に散逸したものもあるという。⁽²⁴⁾ 今後、さらなる研究の中で、森鷗外「沈黙の塔」に結びつく確証が見つかることを願っている。

謝辞

3年強にわたり、高松大学経営学部松繁研究室にて研究助手を務めさせていただきました。短い期間ではございましたが、その間、松繁寿和先生のご研究に触れる機会に恵まれ、論文を拝読させていただきました。また、客観的に物事を捉える姿勢や、研究のあり方についても、日々学ばせていただきました。今回のこの拙い研究ノートをまとめるにあたり、背中を押して下さいましたのも、松繁先生です。

在職中は、諸先生方ならびに職員の皆様にも様々なご指導とご支援を賜りました。この場をお借りして、松繁先生、山口明乙香先生をはじめ、お世話になりました皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 〔1〕 森鷗外「沈黙の塔」鷗外全集 第7巻、岩波書店、p381-393

参考文献

- (1) 中島国彦 (2022)「森鷗外 文芸の散歩者」岩波新書、p.159-160
- (2) 妹尾河童 (1983)「河童が覗いたインド」新潮文庫、p.100-101
- (3) 香月法子(2011)「パールシー社会における『保守派』と『改革派』の対立構造」現代インド研究 第1号、p.199/p.202
- (4) 香月法子(2016)「パールシー・コミュニティの人口減少と高齢化問題」、宗教研究 89巻別冊、p.430-431
- (5) TATA(The Tata Group) HP Heritage “Gandhi & The Tatas”、
<https://www.tata.com/newsroom/heritage/gandhi-tatas-swaraj-to-satyagraha>、閲覧日：2025年7月5日
- (6) COURRIER JAPON (2024)「インド財閥タタ・グループ会長の経営手法『私の強みはじっくり考えること』」、<https://courrier.jp/news/archives/379105/>、閲覧日：2025年7月6日
- (7) 森鷗外「航西日記」鷗外全集第35巻、岩波新書
- (8) 渋沢雅英『渋沢栄一伝記資料』デジタル化の意義、渋沢栄一記念財団 HP、
<https://www.shibusawa.or.jp/eiichi/himago/himago05.html>、閲覧日：2025年7月

4 日

- (9) 山野智恵(2000)「仏教における近代化の問題—『密教発達志』とその批判をめぐって—」智山伝法院
- (10) 本多隆成(1994)「大谷探検隊と本多恵隆」平凡社、p139
- (11) 入澤崇(2011)「大谷探検隊の目指したこと」日本印度学仏教学会第 62 回学術大会
- (12) 米田茉衣子「東京藝術大学の前身『東京美術学校』とは？歴史や教師陣を紹介」Art Plaza Times 2022.05.28 記事、<https://artplaza.geidai.ac.jp/column/8287/>、閲覧日：2025 年 6 月 25 日
- (13) 文京区立森鷗外記念館 NEWS No.46、https://moriogai-kinenkan.jp/uploads/fckeditor/kanpou/uid000001_20240322154212ad73650f.pdf、閲覧日：2025 年 7 月 16 日
- (14) 外川昌彦(2023)「岡倉天心とインド」慶応義塾大学出版会、p.38-40
- (15) 楠元町子(2001)「岡倉天心に見る万国博覧会と異文化交流」言語文化 (9)
- (16) 外川昌彦(2020)「岡倉天心とヴィヴェーカーナンダの反響するアジア美術史感—インド美術史論争におけるギリシア起源説と社会進化論の克服を通して—」日本研究 60
- (17) 岡本佳子(2012)「インドにおける天心岡倉覚三—『アジア』の創造とナショナリズムに関する覚書き—」Institute for Cultural Interaction Studies ,Kansai University
- (18) 日野由希(2018)「島崎藤村と対インド日本文化外交の挫折—戦前期日本ペンクラブによる日印交流史—」つくばリポジトリ、p.22-23
- (19) 岡倉天心「東洋の理想」講談社学術文庫、p210、p193
- (20) 杉原薫(1996)「アジア間貿易の形成と構造」p.1-2
- (21) 末延芳晴(2008)「森鷗外と日清・日露戦争」平凡社
- (22) 森まゆみ(1997)「鷗外の坂」
- (23) シュレスター・ブパール・マン(2010)「インドにおける CSR の歴史と現状」創価大学大学院紀要、p.2-3
- (24) 多胡吉郎(2024)「鷗外の遺品～森於菟と Тайワン 遥かなる旅路～」現代書館、p86